

もも・ネクタリン整枝剪定講習会資料

令和7年12月～
JAグリーン長野営農部

1. 整枝・剪定の時期

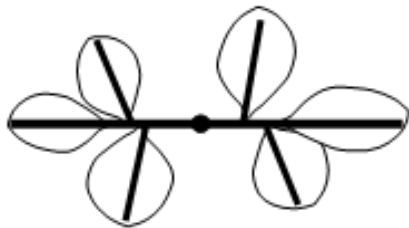
凍害の被害軽減のため、実施時期に注意する。

- 1) 凍害の発生率が高まるため厳寒期の剪定はなるべく行わない。
※自発休眠中の剪定は、望ましくない。自発休眠打破の目安は1月上旬頃です。
- 2) 若木（10年生未満）や、樹勢の強い樹は2月下旬～3月初旬に実施する。

2. 整枝・剪定の基本

穿孔細菌病の春型枝病斑切除を鑑み、枝量を若干多く残す。但し、残しすぎて 着果が多くなる→作業が遅れ袋掛けも遅れる→感染時期が長く・小玉になる。とならないようにする。

- 1) 日当たり、作業性、薬剤の掛かりを意識する。
- 2) 樹が混んでいる園は、間伐・縮伐を行う。（樹の間隔は、通常8～9×8～9m必要）
- 3) 食味の良い果実が収穫できる枝は短果枝(10cm未満)・中果枝(10～30cm)のため、樹勢を適正に保つ。
- 4) 1本の樹では骨格を作る整枝と、成り枝を整理配置する剪定とを区別し、枝の勢力差（主従関係）をハッキリつける。大枝を抜き、共枝にしない(大・中枝整理)。中・短果枝を多く作る、残す。
- 5) 大小いずれの枝も基部と先端を小さくした下記の『葉形』に近づけて品質を揃える。

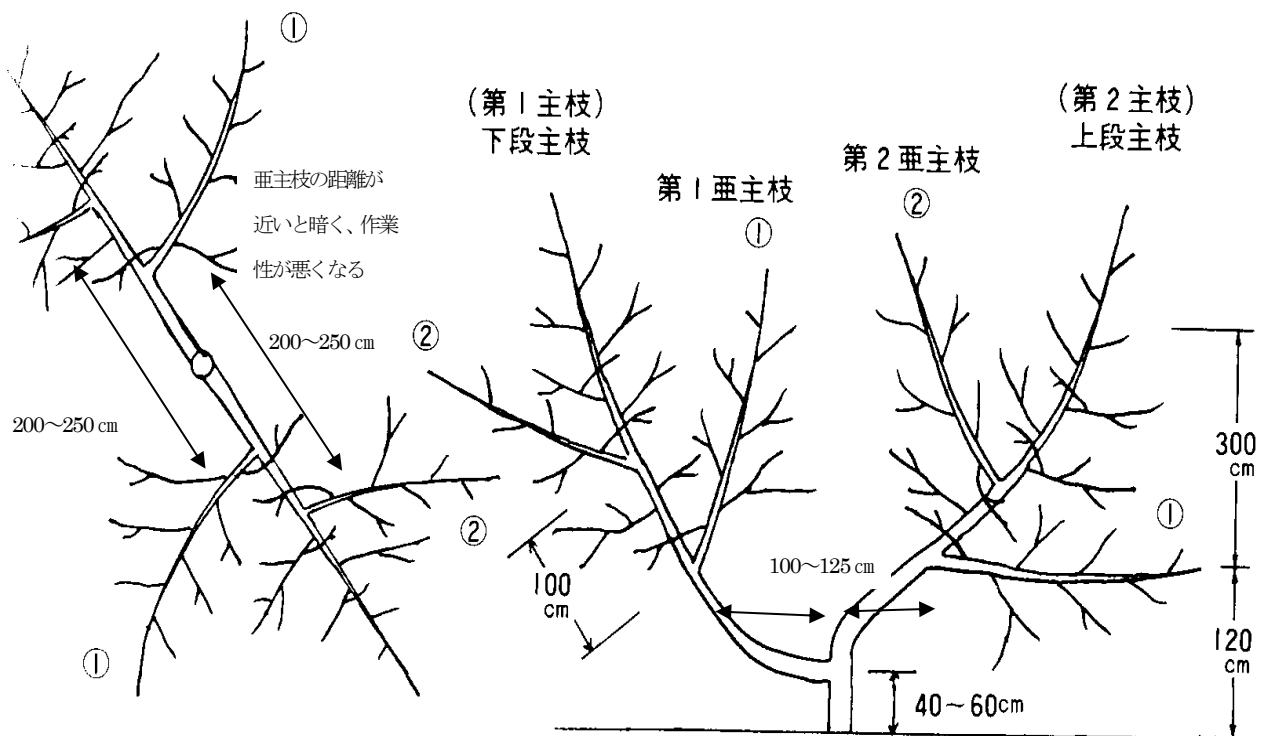


主枝、垂主枝も葉型になるように枝を配置（上から見て）



枝は葉型になるように（模式図）

3. 開心自然形（基本樹形）の樹作り



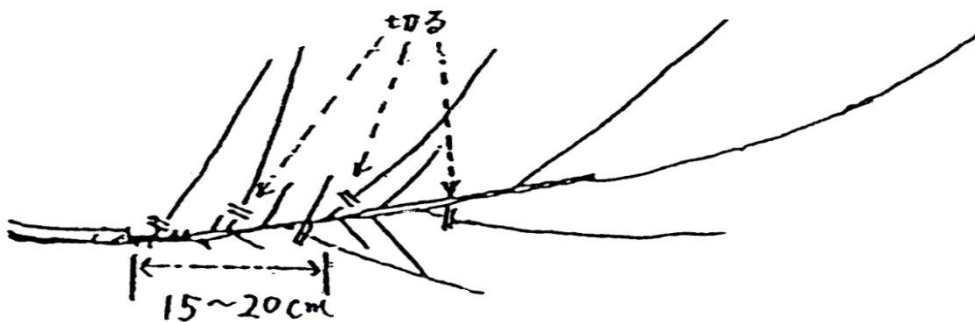
開心自然形仕立ての目標樹形

1) 骨格枝の構成

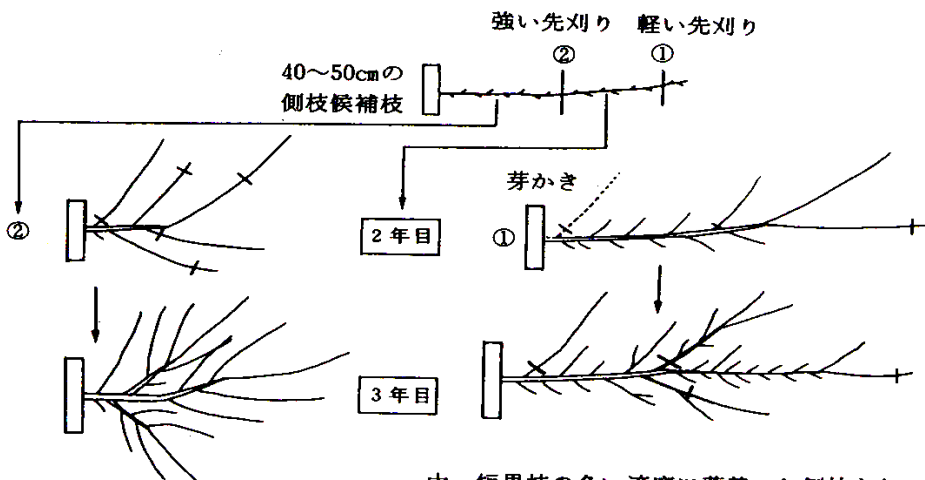
- ①主枝の数は2本、亜主枝の数は4本とする。南西に一番大きな主枝を配置する。
 - ②1年生苗木を植え付けた場合、基本的には苗木の色が褐色に変わっている位置(地面から60~70cm程度)の、葉芽があるところで切り返す。(副梢の葉芽は使わない)
 - ③2年目は、第一主枝は負け枝防止のため主幹の延長枝より、細く発生角度の広い、1年遅れの枝又は、副梢を選び、地上から40~60cmから分岐させ、第二主枝は主幹の延長枝を利用する。(主幹の長さが短いほど旺盛な生育となる)
 - ④主枝の斜立角度は50度前後を維持するが、第一主枝は第二主枝よりもやや広くする。
 - ⑤3年目以降では不要な枝を剪除し、支柱等を添えて主枝候補枝の延長を図り主枝を確立する。
主枝候補枝は葉芽を確認し、外芽で切り返す。
 - ⑥各主枝には、各2本の亜主枝を配置し、1樹内に4本を配枝する。
 - ⑦樹の拡大に伴って、第二主枝から第一亜主枝をとる。第一亜主枝は地上から1.2m付近から選び、第二亜主枝は第一亜主枝より1m高めの位置からとる。第二亜主枝は、やや小型に維持する。
 - ⑧第一主枝にも同様に、亜主枝をとる。
 - ⑨主幹>第二主枝>第一主枝、主枝>第一亜主枝>第二亜主枝のバランスが崩れないようにする。
 - ⑩主枝・亜主枝の先端付近は、小さい枝を密に配置し、先端は外芽で切り返す(先刈り)する。
 - ⑪添え木・枝吊り・夏季剪定がポイントになる。
 - ⑫幼木~若木期は、主幹(主枝)の添え木を徹底し、春~夏の新梢管理(芽かき・摘心・剪除・誘引・捻枝等)を月2回程度行う。特に主幹に大きな切り口ができないように管理する。
- ※あくまで基本的な考え方。地力や樹勢等を考慮し行う。苗木から若木時期の整枝・剪定が重要。

4. 側枝・結果枝の取り扱い

- 1) 発生角度の狭い枝、太枝を切り取る。負け枝になるような枝を置かない。
- 2) 残す結果枝は、直上・直下を取り、やや斜立しているものがよい。成らして垂らす。
- 3) 間引くときは基部2~3芽残し、次年度以降の結果枝作りをする。



- 4) 長果枝の先刈りは、通常行わないか、軽くする。



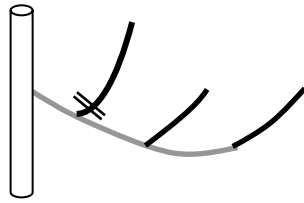
中・短果枝の多い適度に落ち着いた側枝となる

強い切返しを行なうと長果枝が多発し、
枝が横に広がり日陰を多く作る

5) 長果枝基部 15~20 cmの上芽は、切り落とすか、次年度摘蕾や早目に芽かきとり、徒長枝にしない。

6) 側枝の維持をする。

パターン①

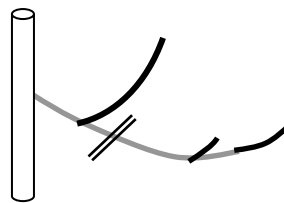


結果枝の先端~基部に強い新梢が発生している



基部側の新梢を切除する(数芽残す)

パターン②



結果枝の先端が弱り(ハサミの長さより短い)、基部の新梢が強くなっている

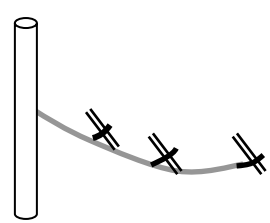


基部側の新梢まで切り戻す



なお、枝によってはパターン①と③を併用し、結果部位の長さを保つ。

パターン③



結果枝の先端~基部の新梢が全て弱い。



原則として全ての中短果枝について、基部にある葉芽まで切り戻す



基部側の新梢まで切り戻してもよい。いずれにせよ、結果部位が少なくなり、回復しにくい!

6) 川中島白鳳等、下垂しやすい品種の注意点。

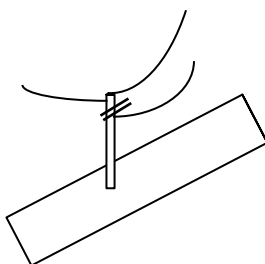
①先刈り等は内芽か横芽で切り、垂れ下がりを防ぐ。(色が変わった所で切る)

②親枝が垂れ下がり子枝に負けたら、上向きの強い枝で立て直しを図る。

5. 日焼け防止

1) 主枝、亜主枝の上部等は日焼けを起こしやすいので、適宜小枝を残し日焼け防止を行う。

2) 主枝、亜主枝上の摘心した枝は、大きくなならないよう小さくしておく。



6. 病虫害対策

①ウメシロカイガラムシの被害があった場合は、樹にも発生が見られる。普段から葉液の掛かりづらい、暗い部位から密度が高まるため、こういった樹は、特に樹作りに注意する。

また、発生部位を確認し、ブラシ等で擦り落とせるよう、目印をしておく。

クワコナカイガラムシの被害にあった場合は、上記同様に樹作りに注意する。

②灰星病対策として、ミイラ果の処分。樹上・園内にあるものを、土中に埋める。

整枝・剪定時に先枯れしているものを剪除処分する。

7. もも・ネクタリン苗木定植本数の目安について

下記内容を参考にし、積極的に、改植・新植を実施し生産力の維持拡大をする。

1) 定植位置の決定（栽植様式・距離）

①栽植距離（10a 当り栽植本数の目安）

※ 園地の形、通路、外周、樹形により異なるため注意。基本樹形を目安。また、計画密植（間伐樹を含まない）ではない場合。

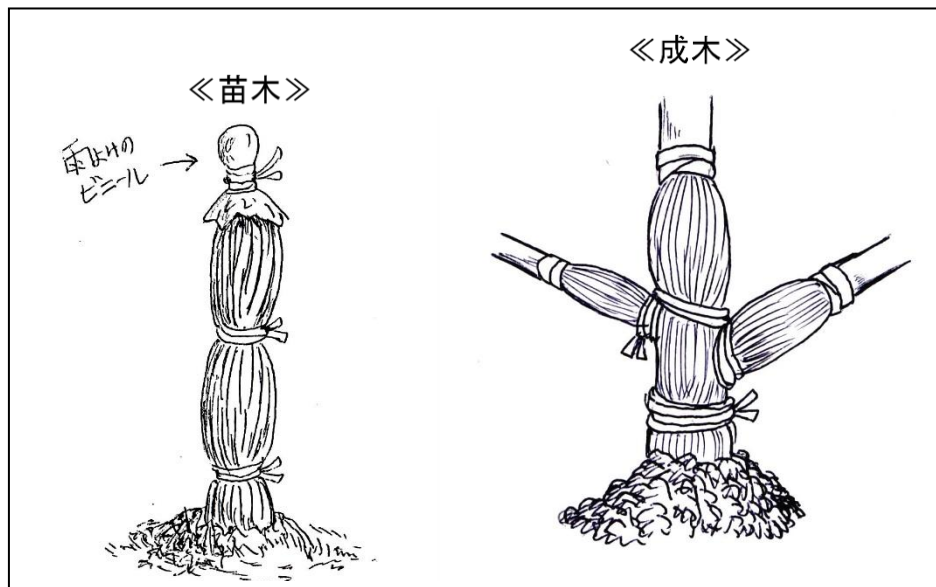
栽培様式	距離	本数
開心自然形	9×8（～9）m	14本以下
斜立主幹形	5×7（～10）m	28本以下
低樹高疎植栽培	10×10m	10本以下

8. 凍害防止対策の徹底

冬期の気温によっては、凍害並びに胴枯病の発生が心配されるため、防寒対策を徹底する。若木（10年生未満）、樹勢が強いものは、特に凍害を受けやすいので、丁寧に防寒を実施する。

【稲ワラによる方法】※現状では、最も効果が高い。

- (1) 防寒の実施は、11月中下旬～12月初旬に行う。 ※最低気温が0℃を下回る頃。
- (2) 3～5年生樹は特に被害を受け易いので防寒を徹底するが、それ以降の年代の樹でも樹勢が旺盛な樹は、実施する。
- (3) 主幹部を稲ワラで厚さ5cm以上に巻く。
- (4) 稲ワラは基部より穂先を上にして巻く。
- (5) 稲ワラは濡れると防寒の効果が低下するので、シルバーポリや反射マルチ等で上部を覆う。尚、稲ワラの周りをビニールで覆うと一層日中と夜間の気温格差が生じ凍害が助長されるので、上部のみを覆う。
- (6) 地際部は15cm以上、盛土を行う。（接木部の上まで盛り、春に取り除く）
- (7) 春（4月）に稲ワラを取り除いてからは、日焼け防止も兼ねて、白塗材を塗布する。
- (8) 年間ワラ巻きをすると、カイガラムシ類等が寄生する事例が見られるので、注意する。



【太枝の処理】

- (1) 太い枝を切る場合は、図のように切り、ゆ合促進剤を塗布する。

